第４４回中学生人権作文コンテスト
兵庫県大会

最 優 秀 賞

あなたの笑顔を見る「目」

姫路市立安富中学校　３年　坂本　憂

道徳の授業で目にする「差別をしていいのか」、「偏見を持っていいのか」というテーマは、小学生から今に至るまで、変わらず取り扱われている内容だ。もちろん先生は、「してはいけないことだ」と私たちに教え、友だちは「絶対にしないよ」と答える。その度に私の心は、音を立てて割れるような感覚がするのだ。

私は障害者を差別したことがある。私の叔父はダウン症である。ダウン症とは、二一番目の染色体が通常二本のところ偶然三本になることで起こる。私の叔父の症状は酷いものだと聞いた。意思疎通が難しいことや、独り言を言い続けるのは日常的で、夜遅くに家を出て隣の家に入ろうとしたこともあった。そんな叔父を、私は幼いながらに良く思っていなかった。

明確な差別意識を持ち始めたと感じたのは、小学校高学年の頃である。友だちと近所の公園で遊んでいたときに、障害者支援施設の車が通りかかった。「叔父さんが乗っている車だ」と声を出す前に、喉で詰まる。言わないほうがいいと、直感でそう思ったからだ。高学年にもなれば、物事の判断は自分でできるものである。私は叔父を「普通じゃない」と判断していた。障害者という言葉だけで、みんながそのようなことを察してしまうだろうと思った途端に怖くなった。「私は普通でありたい」と思う気持ちが、私の差別意識を生んでしまったのだ。差別はいけないことだと思いつつ、普通とは違う叔父に対して、私は嫌悪感すら抱いていた。そんな叔父は私の隠し事の一つだった。

バレないようにと努めていたある日、いつも通り友だちと一緒に登校していたところ、叔父が家の前に出てきていた。その友だちは近所に住んでいたため、叔父の存在を知っているだろうと、さほど気にもとめていなかった。しかし叔父は、急に大きな声で独り言を言い始めた。一気に顔の中心に熱が集まっていくのを感じ、私は友だちを置いて、走って逃げてしまった。バレてしまったという恐怖心と恥ずかしさから、それ以上何も知られたくないと思い、その日は友だちと話すこともできずに帰宅した。怒りとやるせない気持ちをどうすることもできず、叔父に対して「もっと普通にしてよ」と声を荒げた。勢いに任せて言ってしまったことを後悔したが、叔父は私に「ごめん」と返した。叔父は障害のせいで言語の理解や表現に困難があり、私たちのように会話をすることは難しい。だからこ

そ、言葉を返されたことに、私は思わず驚いてしまった。

沈黙を破って話し始めたのは、その場にいた祖母だった。「叔父さんの精神年齢は三歳児と同じだから、大目に見てあげて」と、祖母は話した。私は祖母が言ったことを、すぐには理解できなかった。見た目は私より遥かに年上なのに、中身は三歳児だなんて言われても困惑してしまう。私は叔父のことを何も知らなかった。周りの大人たちが揃って物悲しい顔を浮かべていたのに対し、叔父は何もなかったような顔で私を見つめていた。感情がないのかと疑ってしまうほど澄んだ目を、私は今でも覚えている。

その出来事から数年、私は中学生になった。叔父とは面と向かって会話もせず、微妙な関係が続いていた。未だに友だちにも打ち明けられないままでいた。従兄弟が家に良く来るようになったのも、このくらいの時期であった。新しく産まれた女の子と触れ合えるよう気を回してくれたのだろう。もちろん、そこには必然的に叔父もいる。いつもなら従兄弟が来ると静かにしている叔父なのだが、その日は違った。女の子を前に大きな声をあげていた。声に驚いて泣いてしまうと思い、私は叔父を止めようとしたが、すでに叔父の側に女の子がいた。女の子は叔父に対し「遊ぼう」と笑顔で話しかけていた。叔父はどことなく嬉しそうな顔をしているように見えた。あのときとは違う優しい目をしていたように思う。何がこの違いを生んだのか、私にはすぐわかった。叔父に対する私と女の子の「目」の違いである。私はいつも叔父を普通じゃない人として見ていたのに対し、女の子は同じ人間としてまっすぐ見つめている。健常者も障害者も同じ人間である。女の子にとっては当たり前であるこの見方を、私はいつからか失っていた。私と叔父は同じである。ただ一本の染色体の違いだけだ。見えていたものを見えなくしてしまったのは、差別意識を持ち始めたあの頃の私だろう。やり直したくてもそうすることはできない。だから新しい「目」を一からつくっていくのだ。

差別や偏見の意識はすぐには消えない。時間をかけて消していかなければならない。その先に待つ叔父は明るく笑っていてほしいと、私は思っている。